

Title	リカルドオの地代論 (一)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.1 (1924. 1) ,p.44- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240110-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカルドの地代論(一)

小泉 信 三

筆者は前日經濟理論家としての Adam Smith を評してその病とすべきは其推究の出發點の謬れることにあらずして其出發の際に於ける立脚地を固執せざることにあり。自家の見地と相容れざる觀察を峻拒するの潔癖を有せざることはなかり。渠の健全なる常識と收受力に富める頭腦とは終に彼れの透徹一貫せる理論家たることを妨げたり。理論家としての彼れは恐らく半途彷徨の評語を避くること能はざるものならん。故に Adam Smith の後には必ず其系統中に存する矛盾を除き曖昧を去り雜駁を整理する者出でざるべからずと謂へり(本誌第十七卷第七號一五五頁)。此の最後の一句は地代論に於ける Smith と Ricardo とに就て就中最も當れるを覺ゆ。Smith が生産物の價格と地代との關係に就て謂ふところは前

後一貫を缺き其地代論中に於て主張するところは管に論證甚だ不充分なるのみならず其の或一節に於ける結論の論據は其の他の一節に於ける結論を覆へす論據たるべきの嫌あり。此等の矛盾と不合理とは Ricardo に依て終に一掃せられたるなり(Ricardo に先んじ若しくは Ricardo と相並んで此と同種の説を唱へたる者に就ては本篇中に於ても後段言及する處あるべし。本誌第十七卷第九十號所載津田誠一「リカルドの先蹤」を看よ)。

Adam Smith に從へば資本の蓄積土地の占有未だ行はれざる處に於ては勞働生産物は悉く生産者に收得せられ生産物の價格直ちに賃銀と一致すと雖も文明社會に於ては生産物の價格は生産に参加せる勞働資本土地に對する賃銀利潤及び地代の三者を以て構成せらるる(或は此三者に分割せらるる)ものなり。彼れは一度び資本の蓄積せられて生産上に利用せらるるや勞働者は復た全生産物を收得することなくして之を資本家と分たざる可からざるに至ることを述べたる後土地占有の効果に及びて一國の土地が悉く私有財産となるや否や地主は自餘一切の人々と同じくその曾て蒔かざる處に刈らんことを欲して其自然産物に對しても猶ほ地代を要求す。森林の樹木田野の草及び有ゆる土地の自然果實の如き土

地の共有物なりし時に於ては僅かに労働者に聚集の勞を費さしむるに過ぎざりしものは、彼れに取りても是に附せられたる追加價格を有するに至る。彼れは今聚集の許可に對して支拂を爲さざるべからず。其労働が或は聚集し、或は生産したるもの、一部分を地主に交附せざる可からざるなり。此部分、又は畢竟此を同一物なる此部分の價格は、土地の地代を構成し、諸貨物の大半の價格に於て第三構成部分を爲すものなり。各社會に於て、各貨物の價格は、結局彼の三部分の何れか又は凡てに分解せられ、進歩せる社會に於ては必ず三者悉く多少の程度に於て構成部分として貨物大半の價格中に參入すと謂へり。(Vol. I. Pp. 51-52)

此一段に於て地代が價格構成要素の一部を成すと謂ふ意味が、先づ地代の高低が賃銀利潤の高低と共に價格高低の原因をなすの意義に解せざるべからざることは、貨物の自然價格と市場價格との關係に關するSmithの所説の當然要求する處なり。彼れの所謂自然價格は一切貨物の市場價格に對する引力中心たるものにして、一貨物の市場價格は久しきに亘りては其自然價格以上又は以下に停まること能はざるものなり。其の然る所以は一貨物の市場價格、其自然價格以上に昇る

時は、其供給増加し、市場價格自然價格以下に降る時は、供給減少するの自働的作用あることに存す。而して此自働作用は、労働者、資本家、及び地主が、各々其労働其資本又は其土地の爲めに平均率に相當する賃銀、利潤又は地代を求めて、之をその低き處よりその高き處に移轉するに依て行はるるものなり。即ちSmithは地代にも亦賃銀、又は利潤に於けると同じく其平均率なるものありて、此の平均が自然價格より離反せる市場價格を再び此に復歸せしむる作用をなすものと解したるなり。地代の平均率に就てSmithが記すところは下の如し。曰く、「賃銀利潤と同様に各社會又は各地方(Neighbourhood)には地代の普通率又は平均率あり。これも亦た……一部は其の土地所在の社會又は地方の一般的事情に依り、又一部は土地の自然の、若しくは改良せられたる豊度に依りて左右せらるるものなり。是等の普通率又は平均率は之をその普通に行はるる時と處とに於ける賃銀利潤、及び地代の自然率を以て呼ぶことを得べし」と(p. 57)。此の三者の各其自然率に適へるものは、貨物の自然價格を合成す。貨物の現實價格が其自然價格と合致せざるときは、此三者の何れか又は凡ては其自然率の上下に離反し、從つて労働、資本及び土地の

何れか又は凡べては或は他より該生産に吸引せられ來り或は該生産より他に流出す。市場に販出せらるる各貨物の量は、自然的に有効需要に適應す。此量が斷じて有効需要を超過せざらんことは、一貨物を市場に齎らすことに其土地勞働又は資本を投ずる凡ての者の利益とする處なり。又その斷じて彼の需要以下に降らざらんことは他の凡ての者の利益とする處なり。若しそれが何れの時か有効需要を超過せば、其價格の構成部分の或者は其自然率以下の報酬を受けざるべからず。若しそれが地代なるときは、地主の利害は直ちに之を促して其土地の一部分を撤回せしむべく、又若しそれが賃銀又は利潤なるときは、一方の場合には勞働者の利害、別の場合には其備主の利害は、彼等を促して、其勞働又は資本の一部を此用途より撤回せしむべし。市場に齎らざる、量は間もなく有効需要を滿たすに足ることを超えざるべし。其價格の一切諸部分は其自然率まで、同價格は其自然價格まで騰貴すべし (p. 59)。

上に述ぶる限りに於ては、Smithの地代が價格構成要素の一たりと謂ふは、單に或原因に因つて定められたる貨物價格の一部分が、勞働者、資本家と共に地主に地代として收得せらるゝことを意味するに止まらずして、地代の高低が價格の高低を決する一原因たりと謂ふにあること明なりと謂はざるべからず。一貨物の價格が賃銀利潤の自然率の外、更に地代の自然率を償ふに足らざる時は、其供給減少して之を高め、之を償ふて猶ほ餘りある時は、其供給増加して之を下降せしむるの理なるを以てなり。地代も亦利潤賃銀と同じく、價格を定むる原因たるものにして、別の原因に因つて價格の定まるを俟つて始めて其有無高低の定めらるゝものはあらざるなり。

二

然るに地代論の章に入るや、Smithは地代は價格を定めずして、價格に依つて定められ、従つて、同じく貨物の價格構成要素たりといふと雖も、其の價格に對する關係は賃銀利潤の此に於けると同じからざることを明言す。即ち彼れに従へば、土地使用の價格たる地代の額は、小作人が損失することなくして能く地主に支拂ひ得る最高價格なり。此の地代額は土地生産物より小作人の農業資本を維持し、加ふるに之に對する其地方の普通利潤を以てするに足るものを控際せる餘剰に歸

着すべきものとす。若し地代額此餘剰に及ばざるときは、それは小作人の能く支拂ひ得る最高價格たらざるべく、又若し地代額此餘剰を超過するときは、小作人は損失者たらざること能はざるを以てなり(註. 145)。地代を地主が土地改良の爲めに投じたる資本に對する利子又は利潤と同一視すべからざること、亦たSmith之を辯ず。蓋し地主は毫も改良の加へられざる土地、又は例へばケルヴの生ずる岩礁の如く、全く人力を以て改良すべからざる土地に對しても、地代を要求するを以てなり。地代は全く、偶々地主が土地の改良に投じたるもの、若しくは地主が收めて損失なきもの(what he can afford to take)に比例せずして、小作人が能く提供することを得るものに比例す(p. 146)。

地代の性質にして此の如しとせば上に述べたる地代の生産物價格を左右するの作用は全く行はれずして地代はたゞ生産物の價格如何に由つて或は有り或は無く、或は高く或は低きものたらざるを得ず。故にSmithは曰く、土地の生産物中、普通市場に販出せらるゝことを得るは、之を市場に齎らすことに用ゐられざるべからざる資本を其普通利潤と共に回収する爲めに通常の價格を以て足るが如き部分のみなり。通常價格にして若し此以上なるときは、其の餘剰部分は自然土地の地代たるべし。若し此以上ならざる時は、貨物は市場に齎さるべしと雖も、地主に地代を供すること能はず。價格が果して以上なるか、ならざるかは、需要に由て左右せらる。故に着目すべし、地代は賃銀及び利潤とは異なる方法に於て貨物の價格を構成することを。賃銀及び利潤の高く若しくは低きは、價格高低の原因なり。地代の高低は其結果なり。一特定貨物の價格の或は高く或は低きは、之を市場に搬出する爲めに支拂ふことを要する賃銀及び利潤の或は高く或は低きが爲めなれども、地代の高く、低く、或は悉無なるは、貨物の價格の或は高く、或は低き爲め、彼の賃銀と利潤とを支拂ふに足る以上大に餘剰あるか、少しく餘剰あるか、或は全く餘剰なきかに由るものなりと(pp. 146-7)。

三

此結論を前に述べたる市場價格と自然價格との關係と相照合する時は、讀者の頭腦は混亂を免るること能はず。今地代の有無高低は生産物の價格之を決すと謂ふ。然るに物の市場價格は其自然價格を引力中心として旋廻し、而して自然價

格は賃銀と利潤と地代との自然率之を合成するものとせば之は究局價格は地代に依りて決せられ地代は價格に依りて決せらるゝと謂ふに歸着するものなり。今 Smith の真意は地代の有無高低が一に價格の高低に由て決せらるゝことを謂ふに在りとせん。此命題と土地の肥瘠如何に由りて耕耘費の高低一ならざるところを併せ考ふる時は、同一生産物を生ずる土地にして地代を生ずること大なるものと小なるものと、其悉無なるものとあるべきは當然想像せらるべき所なり。然るに Smith の論する所は茲に出でずして、或種の土地産物に對しては必ず其の生産搬出の費用を償ふに足る以上の需要あるを以て、之が生産に充てられたる土地は常に必ず地代を生じ、別の或種の生産物にありては事情同じからざるが故に其生産に供せらるる土地は地代を生ずることありと斷ず。

Smith が必ず地代を生ずと認むるは食物(穀物野菜肉類)の生産に供せらるゝ土地なり。然れどもその果して何故に然るかの説明と見るべきものは、人をして首肯せしむるに足らず。Smith は人間は凡ての他の動物と同じく自然に其食料に比例して増殖するを以て食物に對しては常に多少の需要あり。食物は常に多少の勞

働量を購買又は支配することを得、又之を獲んが爲めに進んで何事をか爲さんと欲するものは常に在りと云ふ(p. 147)と雖、是は敢て獨り食物に限るにあらず。Smith 自ら別の處に於て食物に對する欲求の他の便宜品奢侈品に對する欲求よりも胃腑の能力の爲に制限せらるゝところある事を認めたるは、既に Cannan の指摘したるが如し(Theories, p. 218)。Smith は食物生産の用に供せらるる土地の地代額が常に土地の肥瘠のみならず、又位置の便否如何に由つて高低あることを認めて謂へらく、「土地の地代は常に其生産物の何たるを問はず、其豊度と共に高低あるのみならず、又其豊度如何に拘らず、其位置に由つて變動す。一都市附近の土地は遠隔の處にある豊度等しき土地よりも多くの地代を生ず。一方の土地を耕すは他方の土地を耕すよりも多くの勞働を要することなかるべし」と雖も、遠隔地の生産物を市場に搬出するには必ず常により多くを費さざる可からず。故に此中よりしてより大なる勞働量維持せられざる可からず。而して農業家の利潤、並に地主の地代の源たるべき餘剰は減少せざることを得ず。然るに僻遠の地に於ては利潤率は大都市附近に於けるよりも高きを常とす。故に此の減少せる餘剰のより小な

る部分地主の手に歸せざるべからずと (p. 118)。然れども豊度の高低、位置の便否に由りて地代に高低あるものとすれば豊度甚だ低きか、位置甚だ不便なる場合には土地生産物は纔かに勞働と農業資本に對する報酬を擧ぐるに止まりて、此以上何等の餘剰せざることあるべきことは、當然想到せらるべき所なるが如し (Cannan, pp. 119-120)。然るに Smith は此理を認めずして、食物の生産に充てらるゝものは、所在殆ど如何なる土地も常に地代となるべき餘剰を生ずと謂ひ、諾威及び蘇格蘭の荒蕪最甚しき原野と雖も猶ほ牧場として用ゐるに堪え、其飼畜の乳と繁殖とは管に牧夫を養ひ、牧畜者の資本に對する利潤を償ふのみならず、更に地主に對して若干小額の他代を剩すに足れりと謂へり (pp. 147-8)。

更に此一段の説を渠が土地生産物にして地代を生ずることあり生ぜざることありとなすものに關して説く所と比較する時は、渠が此兩者の間に區別を認むる理由の甚だ薄弱なることを感ぜざるべからず。

四

Smith が必しも常に地代を生ぜずといふ土地生産物の重なるものは、羊毛、獸皮、木

材、石材、鑛産物なれども、其各自に就て渠が謂ふところは多岐に亘りて必しも共通の原理と認むべきものを捕捉し易からず。たゞ其の鑛山地代に關して云ふ處には注目すべきものあり。Smith は鑛山はその産出力と所在との如何に由りて或は地代を生じ、或は僅かに賃銀と利潤とを償ふに止りて餘剰を生ぜざることと認む。曰く、「炭鑛が果して地代を生じ得るや否やは一部は其産出力 (rent) に由り、一部は其位置に由りて決せらる。有利の位置を占めたる或炭鑛は、その産出力乏しき爲めに採掘せらるゝこと能はず。生産物は出費を償はざるなり。是等のものは利潤をも地代をも生ずること能はず。又炭鑛にして其生産物の辛うじて勞働を償ひ、採掘に投せられたる資本と並に其普通利潤とを回收するに足るものあり。是等のものは企業家に多少の利潤を供するも、地主に地代を供せず。是等のものは地主は自ら企業家たるを以て、之に投ずる資本の普通利潤を收むる地主の外、何人も之を採掘することとを利とする者なし。蘇格蘭に於ける幾多の炭鑛は斯の如くして採掘せられ、又此以外の方法を以てしては採掘せらるゝこと能はざるなり。地主は、多少の地代を支拂ふことなくして何人の之を採掘するをも許容

せざるべく、又何人も幾許の地代をも支拂ふこと能はざるなり」と。産出力あるも甚位置不便なる爲め地代を生せざる炭鑛あるの理も亦た是に同じ (pp. 165-6)。

Smith は又貴金屬鑛及び寶石鑛に就ては、其地代が「其絶對的産出力に比例せずして、其相對的産出力とも謂ふべきもの、即ち他の同種の鑛山に對する其の優越の度に比例することを認めたり。其理由は一鑛山に一定の産出力あるも、更に産出力勝れる新鑛山の發見採掘せらるゝものあるときは、生産物の價格下落して地代も亦た減少若しくは消滅すべしと謂ふにあり。若し Potosi の鑛山に勝れること、後者が歐羅巴の鑛山に勝れるが如くなる新鑛發見せられんか、銀の價值は下落して Potosi の諸鑛山と雖も猶ほ採掘に値せざるに至らしむることあるべし。」然るに Smith は此點に於て鑛山と自餘の土地とを區別し、地表の所有地 (estates above ground) にありては「其生産物の價值も其地代の價值も共に其絶對的産出力に比例して其相對的産出力に比例せず」云々と謂へり。然れども Potosi の銀鑛の爲めに銀價下落して歐羅巴の舊鑛が採掘に値せざるか、又は地代を生せざるに至ることあり得べしとせば、食物に對する現在の需要が比較的優等なる耕地又は牧場に依て満たさる

ゝが爲めに、或土地が或は耕耘に値せざるか、少くも地代となるべき餘剰を生せざること亦たあるべきなり。所詮食物を産する土地は常に必ず地代を生ずとの Smith の論斷は論據極めて薄弱にして且つ多くの混亂ありと評せざること能はざるなり。

五

Adam Smith の地代論に存する上記の如き矛盾混同不明確を後の學者が不問に附せざるべきは固より其處なり。既に國富論初版刊行の翌年 James Anderson 氏 An Enquiry into the Nature of the Corn Laws; with a View to the new Corn-Bill proposed for Scotland. を著しその McCulloch に依て屢々引用せられたる脚註 (p. 454) に於て穀物に對する一定の需要ありて之を満たす爲めに地味瘠肥の差ある數階級の土地耕さるゝときは最下級地には地代生せず、比較的上級地には現に耕さるゝ最下級地に比し、この生産費の差額に相當する地代生ずるの理を假想例を設け數字に依りて説明したり。(前掲津田氏論文九、(八一—C) 一頁參照) 詢に Anderson が説くところは最後に耕作せらるゝ土地が現實に必ず地代を生せずと謂ふにあらすして、或土地に於ける耕耘費と

利潤との加算額と穀物價格との間の差額を消滅せしむるに至る迄生産費及び利潤高きか又は穀物價格廉きときは、其土地には地代となるべき餘剰生ぜざるの理を説くに過ぎずと雖も(前掲論文、一〇一頁)、例へば……各田圃の生産物たる同量の穀物が同價格を以て賣らるゝことを得ば、最沃地の耕作に對する利潤は必ず他の地の耕作に對する利潤よりも甚だ大ならざるべからず。而して此(後者)は不毛の度の増進と共に引續き減退するを以て、究局必ず劣等階級地中の或者を耕作するの費用は全生産物の價值と一致するの事實を生ぜざることを得ずといふが如く、耕圃中の或者が僅かに生産費と利潤とを償ふに止りて、全然地代を生ぜざるを充分可能の事と認めて立論したること疑ふべからず。而して此立論がSmith地代論の重要部分と相容れざるものなること亦た明かなり。

然るにAndersonは是を看過したるか、其の同年の著Observations on the means of exciting a spirit of National Industryに於て英蘭よりの穀物輸入に對する獎勵金の効果に關してAdam Smithの見解を駁し、其一節(5. 376)に於て再び地代の本質に言及したるに拘らず、Smithの地代説の失當なることを謂はずSmithも亦恐らくAndersonの批評

を讀みたるべしと推測せらるゝに拘らず、敢て其説を改むることなくして已めり。(Cannan, p. 221)。斯くの如く當時人の深く顧みずして措きたるものゝ如き地代問題を、時事政策上の中心論題たらしめたるものは、奈翁戰後に起れる穀物條例改正問題なり。RicardoはSmithが始めに説ける地代が貸銀利潤と共に價格の高低を決すとの説を非とし、又その後の下せる食物生産に充てらるゝ土地は必ず常に地代を生ずとの斷定を非とするものなり。然れども渠をして其地代論を公にし、又Smithの謬を正さしめたるものは、先人の學說に對する研究の興味にあらずして、當面切實なる實際政策問題なり。Ricardoをして始めて其經濟論を公にせしめたるものが、地金の高價、銀行券の下落なりと同じく、渠をして其系統の樞軸たる地代論を公にせしめたるものは、穀物條例改正と是に伴ふ諸問題なり。(未完)